

哺乳類標本ができるまで

ひろたに ひろこ
広谷浩子 (学芸員)

博物館のウェルカムベアにはもう会いましたか？

2005年11月3日から博物館のエントランスホールに巨大なアラスカヒグマの剥製が展示されています。来館者をお迎えするウェルカムベアとして、人気を集めています。

初めて見た人は、その大きさに圧倒されます。正面にたつて、顔を見上げてみると、こんな生き物が地球にいるんだということに感心してしまいます。こんなに大きなクマが生きられる自然の豊かさについても、感動を覚えます。

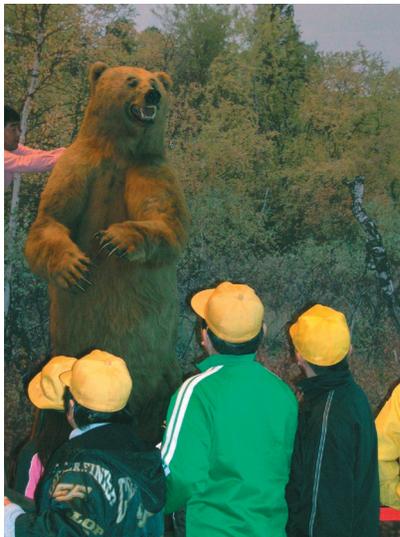


図1 ウェルカムベアは人気者です。

「なぜこんな巨大なクマがいるの？」
「どうやってこの博物館にきたの？」

疑問はつきないと思います。今日は、数ある博物館の哺乳類標本の生い立ちについて紹介しましょう。

哺乳類の資料として、現在当館が所蔵しているのは、剥製、毛皮、骨格、臓器液浸などの標本です。それぞれ、保管状態も利用目的も異なりますが、すべて哺乳類の体から加工された標本です。この標本が、博物館に収蔵されるまで(博物館の資料として登録されるまで)の道のりは、実は平坦ではありません。

博物館までのルートは大きくわけて2つ。1つは、できあがった標本が寄贈・寄託などの形で運び込まれるルートです。もう1つは、検体(死亡した動物)が運ばれるルートです。

第1のルート：寄贈・寄託

トラ、ライオン、ラッコ、オットセイ、ヨザル、ホッキョクギツネ、バビルサ、ホッキョクグマ、マレーグマ、オオカミなど、博物館では、これまでいろいろな標本の寄贈を受けてきました。最大のものは、ウェルカムベアですが、もっともつと小さいもの、ほこりだらけのものもあります。そして、これらの大半が個人のお宅にあったことには、驚いてしまいます。



図2 ライオン剥製(某ビアレストランから)。



図3 バビルサ頭骨(藤沢市の方から)。

寄贈を受ける時にいつも強く感じるのは、標本に対する寄贈者の強い愛情です。時にはもともとの所有者がすでに故人となっており、遺族の愛情が標本にそそがれていることもあります。学術的価値がどうであっても、寄贈を受ける時には、このような愛情に敬意を表しています。ゴミとして廃棄せずに「博物館へ」と、考えてくださった気持ちを大切にしたいと思うからです。引越しを控えてどうしようかと相談に来られたり、ケースが大きく丈夫すぎて運びだせなかったり、子どもの時は背中に乗って遊んでいたという話をお聞きしたり、冷たい北の海で動物を撃つ瞬間の話があったり…。いただいた標本1つ1つには、さまざまなエピソードがあります。収蔵庫で寄贈を受けた標本をながめる度に、このような

エピソードもよみがえってきます。

ものに価値をおいて、それを保管し、愛でるということは、人間だけがもつとても高度な知的活動です。博物館活動の核をなす資料は、この最も人間らしい活動と深く関わっているのです。

第2のルート：検体から標本を作り出すこと

さて、第2のルートはこの数年でどうか軌道に乗ってきたルートでもあります。博物館に運び込まれた検体をもとに、剥製やなめし皮や骨格標本をつくり出すルートです。博物館の展示室にいる、りっぱな展示物の中には、このルートをたどったものがかなりの数にのぼります。

検体の入手先はさまざまです。動物園、水族館などで死亡した検体を提供してもらう場合は、さまざまな種が提供され、めずらしいものも数多くあります。県立自然保護センターから提供される検体の大半は、カモシカ、ニホンジカ、タヌキなどの県内産の動物です。その他にも、一般の方から道路わきや山中で発見された動物の死体を届けていただくことがあります。

検体の処理方法

こうして、届けられた検体は、いったん冷凍庫に入れられます。そして、すでに加工された標本の種類や検体の新鮮さの度合いなどを考慮しながら、各検体をどのように加工するか、決めていきます。展示用か、研究用か、普及事業用か、用途によって加工の方法もかえていきます。仮剥製、晒し骨格、なめし皮など展示室では見られない標本もたくさん作られます。

動物園などから届いためずらしい動物は、剥製や骨格標本に加工します。加工は、プロの剥製師さんをお願いすることになります。現在の生命展示室の哺乳類ステージや霊長類コーナーには、このようにしてつくられた標本が飾られています。剥製は、動物のおおよその姿や大きさを知るのには、最も適しています。しかし、その個体のもともとの姿を正確に復元しているわけではありませんので、研究のための計測などには適しません。



図4 剥製師さんの手による標本例. ダイアナモンキーの剥製(上)と骨格(下).

自然保護センターや一般の方々から提供された検体の多くは、博物館で標本に加工します。このような自家製標本には、骨格標本、なめし皮、臓器液浸、仮剥製などがあります。できるだけたくさんの標本を保管し、研究者の観察や計測に役立てることを目的に、自家製標本は作られています。今後も数は増えていくことでしょう。

自家製標本ができるまで

自家製標本は、展示室にはあまりありませんが、近年はこのタイプの数が増えてきました。当館では、主に頭骨や体の骨の標本を作っています。骨格標本というと、しっかりと組み立てられたものをイメージされると思いますが、私たちが作っているのは、組み立てず、きれいに洗って晒しただけのものです。

自家製標本づくりは、かなりの時間を要する作業です。標本を作りながら、計測や解剖・観察なども行ないますので、作製作業そのものが研究テーマに直結します。

ちなみに、私は動物の食性と消化管の長さとかかわりを調べるため、胃から直腸までの消化管の長さを記録してい



図5 検体：今日はアナグマです。



図6 計測・解剖作業。



図7 ネットに入れて、タグもつけました。



図8 3ヶ月後 きれいな標本の完成です。

ます。

標本作製では、まず、冷凍庫に保管していた検体を解凍し、体重や頭胴長・肢の長さ・尾長他を測定し、解剖を始めます。解剖によって、毛皮と臓器と骨格の標本材料が手に入ります。臓器は、ホルマリンで固定した後、アルコールに浸し保管します。毛皮は、なめし皮にするために塩を大量にすりこんで、保管しておきます。

骨格は、解剖後、部位ごとに細かい目のネットに入れ、水に浸して腐らせません。バクテリアや、たくさんの昆虫の力も借りて、むだな肉や脂がとりのぞかれます。夏なら2～3ヶ月で骨だけになります。これを水洗いし、過酸化水素水

を使って漂白して、乾燥させ、晒し骨格標本ができあがります。

こうして、手をかけてつくった自家製骨格標本は、すでに、1,280点にもなっています。当館の哺乳類資料のうち1,500点が登録済みなので、かなりの割合をしめていることとなります。

1番必要なのはマンパワーです

当館の哺乳類標本は、筆者の着任前におもに採集・加工されたげっ歯類・食虫類の仮剥製、頭骨標本と、着任後に収集されたタヌキ、アナグマ、ニホンジカ、カモシカ、イノシシ、ニホンザルなどの頭骨・晒し骨格標本が大きな割合を占めたものになっています。なりゆきで集まったことは否定できませんが、県内とその周辺のコレクションが充実したことは喜ばしいことです。

今後は、このような偏りを正すよう、収集点数の少ない動物を中心に積極的に収集を進めていきたいと考えています。

しかし、どうしても大きく立ちちはだかる問題は、人手不足だということです。哺乳類は標本にするまでに、どうしても時間がかかります。数をこなすには、人手がどうしても必要です。ボランティアの方々に助けられながら、どうにかやっている状態です。冷凍庫も骨が入ったバケツも満杯なのに…と、焦りばかりが大きくなります。

どなたか、一緒に標本を作りませんか？楽しいだけの仕事ではなく、地味を通りこしてきつい仕事ですが、それだけに、やりがいもあり、魅力もあります。現に、骨格標本や解剖とは全く無縁だった筆者は、骨や筋肉の形や色の美しさにすっかり魅せられています。自らの手で、標本を作り出す過程こそ、人間にしかできない、高尚な行動ではないでしょうか。

自然科学のとびら
第12巻4号(通巻47号)
2006年12月15日発行
発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館
館長 齋藤靖二
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田 499
Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846
<http://nh.kanagawa-museum.jp/index.html>

編集 木場英久
印刷所 文化堂印刷株式会社

© 2006 by Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.

